

10年後の水文化を考える前に……
私たちと水とのかかわり

序章 

「10年後の水文化を予測するためのツールブック」発行の目的

必要なのは「未来を見据えた」水の文化

ほんの数十年前まで、日本人は湖沼や河川、井戸から水を汲み、それを運んで暮らしていた。しかし、今は蛇口をひねれば飲み水が出て、トイレはレバー1つで水がきれいに洗い流してくれる。主に女性が担っていた家事の負担が減り、下水道の普及によって衛生面も向上した。飲み水の確保がままならず、汚水も垂れ流しで乳幼児の死亡率が高い途上国に比べると、この変化は喜ばしいことと言ってよい。

その反面、水をめぐって成り立っていたコミュニティが失われ、上下水道の普及で費やすエネルギーが膨大になるなど負の面もある。かといって、また元の不便な生活に戻ることはきっと不可能だ。

日本はこれから（一部はすでに）さまざまな問題と直面することになる。もともとエネルギーや食料の自給率が低いうえ、少子高齢化による社会構造の変容、人口減少による税収減など、水インフラをはじめとする今の社会システムを維持するには厳しい要素も見え隠れしている。

はたして日本の水文化は、今のままのしくみを次代に引き継げるのだろうか——。これが今回の「10年後の水文化を予測するためのツールブック」をまとめた出発点である。

ミツカン水の文化センターは、1999年（平成11）の設立以来、「快適な生活を支える水文化をきちんと認識して、水を大切にしよう」というメッセージを伝えてきた。「人と水のか

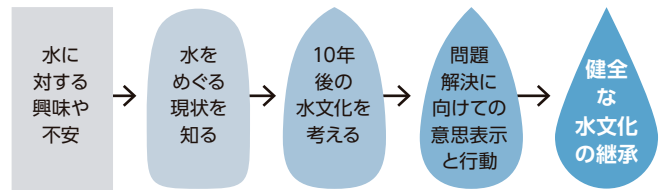
かわり」はすなわち「水の文化」と捉え、機関誌『水の文化』などを通じて「現代版の水文化」を提示しようと努めてきた。

設立15年を迎えた今、豊かな水環境を次代に残すためには、〈少し先の未来〉を見つめて、水に関する正しい知識と予測に基づく「健全な水文化の継承」をめざすことが必要ではないかと考えた。

今回まとめた「10年後の水文化を予測するためのツールブック」は、これから問題となりそうな（あるいはすでに問題となりつつある）トピックスを取り上げ、主に官庁や自治体が公表している水に関するデータを集め、現状を把握することに努めた。それが〈少し先の未来〉の水文化を予測することにつながると考えてのことだ。

まだまだ不十分かもしれないが、水にも関心があり、志の高い市民とともに、「健全な水文化の継承」を考える第一歩としたい。

「水文化」を次代に継承するためのアプローチ



いつの間にか離れてしまった「水」と「人」の距離

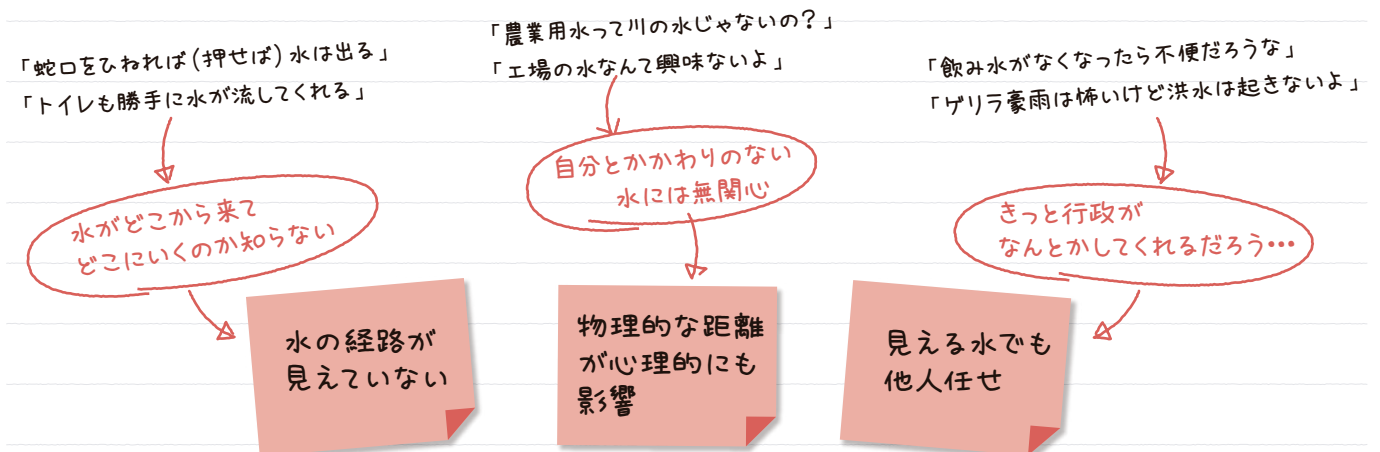
「水」と「人」を隔てているものとは？

水は人間が生きていくうえで欠かせないものだ。しかし、今の日本では水を意識しなくてもふつうに暮らすことができる。それゆえ、人々の関心が水から離れていったのではないかな。

飲み水がどこから来て、使い終わった水がどこへ行くのか、

正確に言える大人はあまり多くはないだろう。しかし、大きな災害や突然の断水を経験すると、自分たちがふだんいかに水道に頼った生活をしているかがわかる。

「10年後の水文化を予測するためのツールブック」を作成するにあたって、人と水を隔てているものについて考えた。



水と人のかかわり (水文化) を俯瞰する

多くの視点を盛り込むために

水は生活に密着しているものだ。それゆえ、人々の意識は、身の回りにある水に偏りがちである。

しかし、健全な水文化を継承するには、ふだんかかわりの少ない水も含めて、なるべく多くの視点が必要になる。そこで「10年後の水文化を予測するためのツールブック」を編集するにあたり、できるだけ広い範囲を網羅するために「人と水のかかわり」(=水文化)を俯瞰するマトリクスを試作した。

中心はもちろん人である。横軸は「見える水」と「見えない

(見えにくい)水」の境界線である。目に見えない(見えにくい)水よりも、目で見てさわられる水の方が親近感があるのではないか。

さらに、生活では意識することのない農業用水や工業用水などの物理的および心理的に隔たりが大きい水は、日常使っている水道水などよりも「遠い存在」と考えられるだろう。

中心の人から外側へ離れるにしたがって、その水に対する人々の興味や関心は失われがちだと考えられる。



10年後の水文化を予測するうえでの問題点

地球規模の問題と日本の水環境の要因

次に、10年後の水文化を予測するうえでどのようなトピックスを扱うべきかを考えた。

まずは日本に限らず人類の未来を左右する大きな問題がある。①エネルギー問題、②食糧問題(すなわち水[仮想水]問題)、③人口問題(地球規模では増加)の3つだ。

そして〈少し先の未来〉を見据えるにあたり、日本の水文

化に変化をもたらすであろう要因も見ておかなければいけない。

これには、①人口減少(すなわち税収減)、②ICTの進化、③気候変動の3つを挙げた。

これら6つの問題・要因を上に掲げたマトリクスと併せて考え、今回取り上げるべきテーマを考えた。

1 人類の未来を左右する3つの問題

エネルギー問題

食糧問題(水問題)

人口問題

2 日本の水環境に変化をもたらす要因

人口減少(税収減)

ICTの進化

気候変動

マトリクスと上記6項目を念頭に検討

「10年後の水文化を予測するためのツールブック」構成(次ページへ)

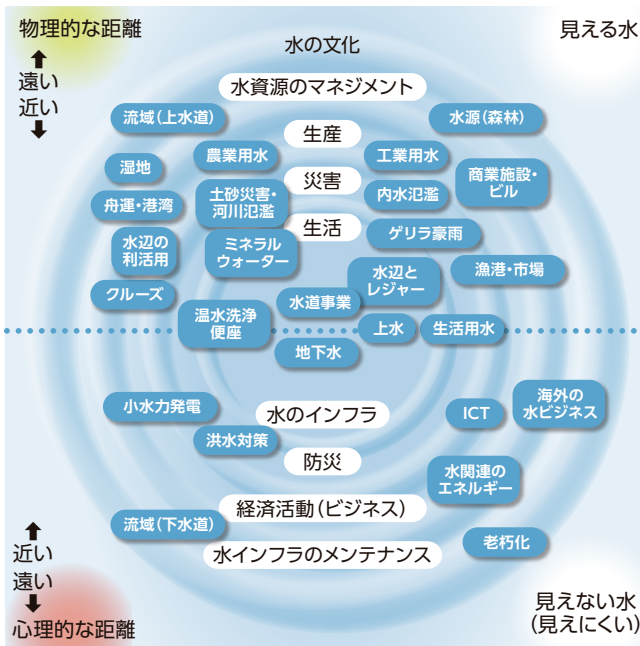
ツールブックで扱うテーマ一覧

現状をつかむことで見える〈少し先の未来〉

章は大きく分けて3つある。まず1章では、日本の人口動向と水資源について見ていく。少子高齢化や人口減少が水環境にどのような影響を与えるのかを、ここでおおまかに紹介する。

2章は4つの節から成る。(1)生活・水のインフラは、暮らしに身近なテーマをまとめた。(2)災害・防災では、時として脅威になる水とその対策について考える。(3)生産・経済活動(ビジネス)は、人が水から受ける恩恵の部分を探る。(4)水資源のマネジメント&水インフラのメンテナンスは、生活するなかでもっとも縁遠いけれど、水環境の持続可能性という点で非常に重要な問題をはらんでいる。

3章は、〈少し先の未来〉に踏み込み、ICTの発展および少子・高齢化によって水文化はどう変わるかについて切り込む。また、今回扱うテーマを落とし込んだマトリクスも見てほしい。



1章

日本の人口動向と水資源

- 日本の将来人口予測 ●地球と日本の水資源
- 上下水道の維持・管理

2章

日本の「水と人」を巡るデータ

(1)生活・水のインフラ

- 生活用水 ●上水 ●水道事業 ●ミネラルウォーター
- 水辺とレジャー ●地下水 ●湿地 ●温水洗浄便座

(2)災害・防災

- ゲリラ豪雨 ●情報通信技術 ●土砂災害と河川氾濫
- 内水氾濫

(3)生産・経済活動(ビジネス)

- 工業用水 ●農業用水 ●小水力発電 ●水にまつわるエネルギー ●海外の水ビジネス市場 ●舟運と港湾
- 漁港と市場 ●クルーズ

(4)水資源のマネジメント&水インフラのメンテナンス

- 水インフラのゆくえ ●流域マネジメント(上水道&下水道) ●水辺の新たな利活用 ●大規模商業施設・ビルの水循環 ●水源のマネジメント

3章

将来の水文化を意識するための7つの潮流

「過渡期をいかに乗り越えるか」が水文化継承のカギ

人口減少はほんとうに悪いことなのか

すでに日本は人口減少時代に突入している。人口が減ると税収が少なくなる可能性が高い。たとえば水のインフラに対する維持・管理にこれまでと同じように投資できなくなるうえ、それを担う人材の不足も心配だ。

ところが、「人口減少はそんなに悪いことではない」という識者もいる。なぜなら、今の状態をキープして次の世代に受け渡すことができれば、リソースを集中できるからだ。たとえば、1人あたりの居住空間や教育といった社会的サービスを、今よりも恵まれた環境にすることが可能である。

そのためにも、これから迎える過渡期をうまく乗り切らなければならない。一人ひとりが社会動向に注視しながら、同時に水文化に関心を持ち、時には声をあげていく必要があるだろう。

「10年後の水文化を予測するためのツールブック」では、見えない水をできるだけ可視化し、水と人の物理的かつ心理的な距離を縮めることを目的としている。水の問題を「わがこと」と認識することによって、健全な水文化の継承につながることを期待したい。